未刊

中古歌家集

一

谷山茂
樋口芳麻呂 編

古典文庫第一七〇冊

昭和三十六年九月二十日　印刷発行　（非売品）

中古私家集（一）

編者　谷山茂
　　樋口芳麻呂

発行者　東京都北区西ケ原町三ノ三四　吉田幸一

印刷所　東京都板橋区熊野町三四　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（豊島局区内）北区西ケ原町三ノ三四　古典文庫
電（九一九）二七一七
振替口座東京一四五九七番

谷山茂
樋口芳麻呂 編

未刊

中古歌家集

古典文庫

凡　例

一、本書は、中古の私家集のうち未刊のもの、または孔版その他で既刊されていても今は容易に入手しがたいものなどを、飜刻し刊行しようとする「未刊中古私家集」の第一冊として、とりあえず経盛集・親宗集・公重集の三集を収めたものである。

一、原本に忠実に飜刻することを旨とし、漢字仮名の別、仮名づかい、送り仮名、合点、傍注等も底本のままとしたが、異体古体の文字等は普通の表記に改め、通読の便宜のため濁点を付し、また詞書などには句読点を施した。

一、各集毎に、それぞれの歌頭に配列順序を示す番号を付した。そして、その番号中、括弧を付してあるのは、集中の他人の歌である。

一、勅撰集および主なる私撰集に選入されている歌や他の私家集、歌合等に見える歌については、その右肩に∧　∨を付して集名等を記入したが、なお見落しも多かろうと思うので、大方の御教示を仰ぎたい。また、あきらかに本文の誤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

脱とおもわれる箇所や不審の箇所についても、その傍に＜　＞を付して編者の簡単な私注を加えた。ただし、＜　＞を付していない傍注等は、すべて原本に見られるものである。

一、経盛集は、一まず編者（谷山茂）蔵本を、親宗集は、前田家尊経閣文庫本を底本とした。他日、校合すべき伝本の出現することを期待する。公重集は、善本と認められる佐佐木信綱博士蔵本を底本とし、編者（谷山茂）蔵本をもつて校合し、その異同を次のごとく注記した。

はかり（さかり谷）
はるに（はるかに谷）

黒点を付した部分が底本の本文であり、括弧内が校合本の本文およびその略称である。

一、解題は各集の書誌的解説や資料的考察を中心とし、簡潔を旨とした。

一、本書の刊行にあたり、貴重な御蔵本の閲覧と飜刻とをお許しいただいた前田家尊経閣文庫ならびに佐佐木信綱博士、また種々御教示を忝くした久曽神昇氏・太田晶二郎氏に厚くお礼申し上げる。

昭和三十六年六月

谷山茂

樋口芳麻呂

目次

解題
平経盛集……（九）
中納言親宗集……（一九）
風情集……（二九）
平経盛集……四五
中納言親宗集……七七
風情集（公重集）……一〇九

解題

平経盛集

平家にあらずは人にあらず――経盛は清盛らと共に、その平家全盛期を相寄つて支えた忠盛の子息たちの一人である。しかし、経盛の政治的武将的存在意義は、舎兄清盛のあまりにもたくましい英雄的活躍の蔭にかくれて、ともすれば忘れられがちである。けれども、経盛はすでに父忠盛が一面においてもつていた歌人的素質と教養とを継承して、平家一門の文化的世界を構成するために、清盛らに欠けていたものを、みごとに充足していると考えられる。そのことは、この経盛集を通読することによつても、改めて確認されねばならないだろう。もしも、平家歌界とでもいうべきもの――ひいては平家一族の優にやさしい文化圏とでもいうべきもの――の存在を認めるならば、その中核的リーダーとなつたのは、この経盛ではなかつたかとおもわれる。すくなくとも、忠盛直系の子孫中では、舎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

弟忠度とともに、忘れることのできない歌よみであり、文化人であつた。当代歌界の双璧たる清輔・俊成のいずれにも指導を受け、いわゆる治承三十六人歌合によれば、当時僧俗の代表的歌仙三十六人のうちに、舎弟忠度、嫡男経正とともに加えられている。

寿永以後、朝敵という烙印を押し付けられた平家一族の歌が、千載集に「よみ人しらず」として採られていることは、周知の事実だが、同集の恋部に「よみ人しらず」として、

いかにせむ御垣が原に摘む芹のねにのみなけど知る人のなき

とあるのは、経盛の詠である。爾後、勅撰集に採られている経盛の歌は、十一首を数える。

この経盛にも幸い一巻の家集が残されている。今ここに飜刻する編者（谷山茂）蔵の一本は、近世の袋綴新写本で、藍紙表紙の題簽に「刑部卿平忠盛集附経盛歌集」とある。すなわち父子二代の家集を合冊したものである。縦二十七糎、横十九・二糎、墨付二十五枚、一面十行。内、忠盛集は七枚（流布本系統のも

の)、経盛集は十八枚。経盛集の内題には「平経盛卿詠」とあり、歌数は百二十八首である。その奥書によれば、賀茂重保の勧進に応じて、寿永元年六月十日に賀茂社に奉納した自撰家集である。すなわち、月詣和歌集の序に「三十六人の百首をあつめて、神の御たからにそなふ」とある、その三十六人集の一つであろう。(同じく二十六日には、息経正もその家集を賀茂社に奉納している。)

さて、この経盛集の所収歌百二十八首は、春夏秋冬恋雑に部類されており、そのうち二十一首は他人の歌である。また他人の歌のうち一首(一一一番)は亡父忠盛の遺詠であるか、その他はすべて贈答歌として含まれている。それら贈答歌の相手方は、大宮(近衛后多子)をはじめとして、実定・実家・円実・公通・実国・実房・俊成・清輔・顕昭・三河内侍・小侍従・皇后宮兵衛内侍・女御家宰相・高陽院中将・新院上野等である。その他、詞書などのうちに見える人々としては、忠盛・忠度・白川殿(清盛女)・重保・季経・頼輔等がある。

次に、集中の経盛自身の歌をみると、すでに続詞花集に採られている歌や、後に千載集に「よみ人しらず」として拾われている歌は、ここには見えない。そし

て、新勅撰所収歌一首、玉葉所収歌五首、風雅所収歌二首等が見える。また、治承三十六人歌合所収歌四首、月詣集所収歌十二首等が見える。現存の月詣集に採られた経盛の歌は十三首だから、そのほとんどがこの家集に見えるわけであり、その点からみても、本集は明らかに月詣集編集の資料となつているといえよう。

経盛の官途における経歴は、公卿補任などに明らかであるので、それらの大方は省略して、その作歌活動を中心とした略年譜を作成して置く。——

年号	西紀	年齢	諸事項（○印は経盛事項、△印は参考事項、太字は経盛集の歌番号）
天治元	一一二四	1	○誕生（母は源信雅女）
仁平三	一一五三	30	△正・一五、父忠盛卒。○父在世中に、忠盛家にて、「隔関恋」の歌（八四）を詠む。
久寿二	一一五五	32	△五・七、藤原顕輔歿。○万代集巻三所見の顕輔の歌の詞書に「前参議経盛の家の歌合に」とある。とすれば、これより先に

も、すでに「経盛家歌合」を催したか。存疑。

△このころ、後葉集成る。

保元元 一一五六 33

△七・二、鳥羽法皇崩。保元の乱。

平治元 一一五九 36

△平治の乱。○戦功によつて伊賀守に任ぜらる。

永暦元 一一六〇 37

○四・七、大宮（多子）の権大進を兼ねる。年次未詳だが、大宮との贈答歌（一三・一四）、大宮小侍従との贈答歌（三五・三六）等あり。なお、当時、清輔は大宮大進で経盛の直属上役であつたが、この年の清輔朝臣家歌合には、経盛の歌はまだ見えない。

長寛二 一一六四 41

○このころの十二月、顕広（俊成）との贈答歌（七〇・七一）。長秋詠藻によれば、両者は近所に住んでいた。

永万元 一一六五 42

△七・二八、二条帝崩。○保元三年一一五八からこの頃までの間に、二条院の和歌会に出詠（一一・八五・一二四）。

○このころ続詞花集成り、二首入選。

○このころ今撰集成り、同集に経盛集所収の高陽院中将の歌（九一）が見える。

○このころ（応保元年六一一七月から仁安元年正月までの間）、左京大夫顕広（俊成）の打聞の資料として、亡父忠盛の歌をまとめて提供するか（一〇八）。

仁安元　六一六　43

○五月、経盛朝臣家歌合を催す（夫木抄）（三二・三九・一二八）。

○重家朝臣家歌合に五首出詠（一六・五五・六九・八一）。

○実房の三位中将時代（永暦元年から仁安元年までの間）、実房との贈答歌（一九・二〇）。

仁安二　六一七　44

○八月、経盛朝臣家歌合を催し五首出詠（五〇）。

仁安三　六一八　45

○冬、経盛朝臣家歌合を催す（重家集）（六八・七三）。

嘉応元　六一九　46

○頼輔家歌合に出詠（四四）。

嘉応二　七一〇　47

○一〇・九、住吉社歌合に三首出詠（五七・六六・一二一）。

承安元　七一　48　○春、経盛朝臣家歌合を催す（夫木抄）（四・二九）。
△六・一五、六条家の重家、経盛家蔵の万葉集を書写する（万葉集仙覚本奥書）。

承安二　七二　49　○一〇・一七、広田社歌合に三首出詠（九七）。

承安三　七三　50　△八・一五、皇后育子逝去。○これより先、中宮亮季経朝臣家歌合に出詠（三一・八〇）。
△九・九、公通歿。○これより先、公通との贈答歌（七・八）。
△経正朝臣家歌合（夫木抄）。

承安四　七四　51　△三月、後白河法皇、建春門院、清盛の福原別業に幸し、ついて安芸厳島に幸す。清盛以下、これに供奉す（玉葉・吉記）。

治承元　七七　54　△六・二〇、清輔歿。○これより先、清輔との贈答歌（一〇四・一〇五）。

治承二　七八　55　○三・一五、別雷社歌合に三首出詠（五・一五・一二二）。
○成仲八十賀に一首（一二七）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong